

# 個性形成と形態学

ゲーテ自然学からユング心理学へ

三 木 博

## はじめに

本稿の主題は形態学(モルフォロジー)が人間形成論にもたらず独自の視点の考察である。形態学(Morphologie)はその名称が示唆するように、形態/モルフェー<sup>1)</sup>についての学として、ゲーテ(Goethe, Johann Wolfgang von 1749-1832)によって創始された(1817)。現在それは生理学とならんで、生物学の領野をささえる二大支柱のひとつとして展開され、広く認知されている。また生物学のみならず、W.ディルタイ(1833-1911)の精神科学に代表されるような、人間の生の有機的な生成と発展の歴史を考察する人文科学の方法論としても駆使されている<sup>2)</sup>。すなわち生物一般の形態形成のダイナミズムを、とりわけカタチ/構造という観点から追究する形態学の構想は、あらたな人間形成モデルとしても示唆するところが多い。

本稿では考察の主眼を、18世紀ドイツの知的伝統に深く支持されたゲーテ形態学に端を発する形態学思想の脈絡にそいながら、その知的系譜の一部を跡づけてみたい。そのさい考察の基軸となるのは、人間の個性形成のダイナミズムへの問い、もしくは広義の人間形成論としての教育哲学からの問いである。こうした問いへの志向のもとで、本来カタチの意味を問う形態学は、いわば「精神の形態学」として個性のカタチを問うものへと転成してゆくと思われる。

## 1. カタチの現象学

西欧形而上学の歴史においては、カタチへの関心は形相(エイドス)/質料(ヒュレー)、霊

- 1) ゲーテはモルフォロジーという表現を、カタチをあらわすギリシア語のモルフェーから造語した。ゲーテは、抽象的で固定化されたカタチをあらわすドイツ語のゲシュタルトをさけ、むしろ具体的に動的なカタチをあらわすこのギリシア語で、自然の生きた形態を記述しようところみる。
- 2) たとえば中期ディルタイを代表する心理学論文『記述的分析的心理学についての構想』(1894)あるいはその続編をなす『比較心理学について 個性研究のための諸論』(1895/96)などでは、比較精神科学の構想のもとで、形態学による生の類型論を基盤とした個性化論(人間形成論)が展開されている。なお『比較心理学について』については、芸術作品がもたらす人間の個性化理解への貢献をあつかった第四章は、以下に別に訳出しておいた。

[1996, 東北大学教育学部研究年報 44: 43-64]

魂 / 肉体 , 思惟 / 延長 , 精神 / 自然などの二項対立したシェーマのもとで , きわだたされてきた . 見えるものと見えざるものとの相克は , 哲学 という古代ギリシアに淵源する西欧世界に独自の思惟の普遍的な展開のもと , さまざまなヴァリエーション , たとえば心身 ( 相関 ) 論のうちに先鋭化し , 深化してゆく . その相克の陰影は , ギリシアの神々の秘教の懐から , 絶対者への信あるいはコギトの哲学を経由して , たとえばドイツ観念論の高みへ収斂してゆくプロセスのなかにも深く刻みこまれていよう .

もっぱら造形芸術における美のカタチを主題化する近代美学の構想力の論理に内面から深く浸透されながら , いわば自然全体の核心をその生き生きとした形象化と造形作用のはたらしめただなかで直観的にとらえること , このことをゲーテの自然体験は至上命題となしている . 美という根源現象<sup>3)</sup>として顕現する能産的自然 ( natura naturans ) の形象化のダイナミズムをいわば内面から追体験し , 追創造することが , ゲーテ自然学をみちびくライトモチーフをなしているといってもよい .

根源現象は , そこから多様な結果が生じてくるような根本法則と同等視されるべきではなく , その内部において多様なものが直観されるような根本現象なのです<sup>4)</sup> .

根源 現象 ( Ur-Phänomen ) という名辞自体が示唆しているように , ゲーテにとって根源現象こそが「真の象徴的基本現象」<sup>5)</sup>であり , 直観的形象の究極様式である . それはまた自然経験の基礎地平でもある . 「現象の背後になにも探してはならない . 現象自体が学説なのだ」<sup>6)</sup> .

あるいはゲーテはエッカーマンにたいして次のように述べている .

根源現象を見ておどろくならば , ひとはそれで満足すべきなのです . それより高次のものは人間にはあたえられないし , それ以上のものを根源現象の背後に探すべきではないのです . ここに限界があります . しかしひとは根源現象を見ても , たいしてそれではまだ満足できずに , さらにその先にすすめるにちがいないと考えるのです . それはちょうど鏡のなかをのぞいている子供が , その背面になにがあるのか見ようとして , すぐに鏡を裏がえすと似ています ( 1829年2月18日 )<sup>7)</sup> .

ここに見られるような , 現象それ自体にうちひらかれた態度はまさに「現象学的」ともよべるものであろう . ゲーテ自然学は独自の自然哲学として , 「生の永遠の公式」を把握しようと試

3) 「美は秘められた自然法則の表現である . それは美としてあらわれなければ , われわれに永遠に隠されたままである」( *Maximen und Reflexionen*, HA. 12: 467 ) あるいは「美とは根源現象である . なるほどそれは決してそれ自体ではあらわれてこないが , その反映は創造するものの精神のさまざまな表現において可能となり , 自然そのものと同じほど多様である」( Eckermann: 468 ) .

4) Goethes Briefe ( HA ) 4: 231 .

5) 森 淑仁 1988 , 「ゲーテの『顕在する秘密』としての自然理解について 『パンドーラ』とドルンブルクの抒情詩に関連して」『モルフォロギア ゲーテと自然科学』10 , ナカニシヤ出版 : 60 .

6) Goethe, HA. 12: 432 .

7) Eckermann, J. P., *Gespäche mit Goethe*, Wiesbaden 1955: 288f.

みる。ちなみにその自然学のおよぶ射程は、形態学、植物学、動物学、地質学、気象学、色彩論など、じつに広範な領域におよんでいる。なかでも形態学は「形態の方法論」あるいは「形態の形而上学」として、色彩論とならんでゲーテ独自の自然把握の神髄を提示している。それはいわば眼に見える精神の形態を凝視する「カタチの現象学」でもある。

## 2. 形態学の構造

「形態の形而上学」たるゲーテの形態学において自然の生全体は、主客未分のありかた、あるいは思惟即直観、直観即思惟ともいえる「対象的思惟」のはたらきのうちに看取されている。

わたしの思惟は対象から分離されないということ、対象の諸要素、諸直観が思惟に入りこみ、そして思惟によってきわめて内密に浸透されるということ、わたしの直観自体が思惟であり、わたしの思惟は直観である<sup>8)</sup>。

そこでは観察者は、かるやかに戯れ、遊動する自然の律動にいわば同調し共振しながら、自然がとりむすぶイメージを創造的に追体験することになる。自然即神、神即自然(Gott-Natur)とは、根源現象が開示する自然の神性表現のひとつである。「神性は根源現象のうちに、物理的にも倫理的にも開示され、神性は根源現象の背後にひそみ、そこから発しています」<sup>9)</sup>。

さて生命の躍動を貫通するダイナミズムは、たとえば収縮と拡張、呼気と吸気、牽引と反撥などにおける両極性(ポラリテート)の作用と、両極的に分離されたものがまずみずから高め、この高められた両者の結びつきをとおしてさらに、第三のあたらしい、より高度な予期しないものが生ずるプロセスとしての高昇(シュタイゲルング)という二大両輪のはたらきによってもたらされる。あるいは形態形成において、特殊を志向する求心力としてはたらく原型/類型(ともに原語はTypus)構造への洞察と、これと均衡しあつた形態変容の遠心力としてはたらくメタモルフォーゼによる相互浸透作用のなかで精緻に分析されている。

形態学による具体的な理論形成としては、たとえば頭蓋椎骨説、器官の類似、予算一定の法則などがあげられるが、それらはすべて万物は形態を志向するとするゲーテの根本洞察から由来する。ゲーテは自然のなかに偏在する、いわば超越的な生命原理——これはたとえばアリストテレスにならってエンテレケイアとも、ライプニッツにならってモナドとも、シェリングにならって世界霊とも、さまざまに呼びかえられる——を本質的なカタチ(原構造)の認識のうちに認める。

自然はこの本質的なかたちといわばつねに戯れているようなもので、戯れながら多種多様な生命を生みだしているのです<sup>10)</sup>。

8) Goethe, Hamburger Ausgabe( HA )13: 37.

9) Eckermann: 286.

10) ゲーテ『自然と象徴 自然科学論集』高橋義人訳編, 富山房百科文庫。

生物とは生きた形態<sup>11)</sup>であって、形態学は有機体の部分と全体 相互の差異と一致の複合関係を追究する。「人体の形成を他の動物と比較せずに、それ自体から知ろうとする企ては不可能にちか」く、「有機体においてはすべての部分があるひとつの部分に影響をあたえているだけでなく、また逆にあるひとつの部分が他のすべての部分に影響をあたえている」<sup>12)</sup>。それはまさしく「有機的自然の形成と変形」<sup>13)</sup>の理解をめざした自然の学である。またディルタイがゲーテ形態学の主要理念として指摘した直観、比較、メタモルフォーゼ、原型は、有機的生や人間の歴史世界の発生と生成のプロセスを思索するための、みずからの精神科学の理念と方法でもあった。そこでは生の個別化するなち個性化のプロセスをつらぬく形成衝動「あらゆる形成物のなかに見えかくれる正真正銘のプロテウス」<sup>14)</sup>は原理的に、生の単一性、類型(同形性)、そして発展として抽出されている<sup>15)</sup>。

### 3. 根源的自然

ところでゲーテ自然学の知、とりわけ形態学と色彩論とによって代表されるような自然の生成と発展のダイナミズムをめぐる構想は、18世紀ドイツの自然哲学の知的伝統に深く支持されながら、後世の自然観に多彩で特異な影響をあたえつづけている。ここでは近代の自然科学による自然像とはあきらかに背反する自然のイマージュが、濃密なシンボリズムのなかで表出されている。

それは近代自然科学のエートスをつらぬいているような能動的な支配知ではない。すなわち近代を特徴づける知の専制的なありかた「理智知・自己内省的・对象的な思惟」によっていまだ物象化されえない自然の根源的境位への眼ざしである。むしろそれは受動的な意識層に根ざした観照(テオリア)に親和的な知であり、そこでは自然体験の核心が人間存在の内奥にかさねあわされて創造的に表現されているといえようか。

自然を自然そのものとしてなりたさせ、いわば存在の次元で規定している原理を試みに、われわれの内なる自然としての根源的自然(Ur-Natur)とよんでみたい。ここでの根源的自然とは、けっして自然科学の認識において対象論理的に把握されるような客体存在としての自然ということではありえない。根源的自然とは、表象化・対象化される以前の、もしくは表象化・対象化それ自体を本来可能なものとしているが、それ自身は表象性・対象性を超えてた存在論上の場所としての能産的自然の意味である。それは世界経験における根底もしくは基層でもある。

ゲーテにとって自然の核心は、慈母のような根源的な産出力、あるいはそれと同時に怪物性

11) 高橋義人 1979、「形と力 形態学とは何か」『モルフォロギア』創刊号：44 参照。

12) ゲーテ『自然と象徴』：189。

13) ゲーテが1817年に創刊した雑誌『自然科学、特に形態学に寄せて』の副題である。

14) ゲーテ『自然と象徴』：189。

15) 高橋義人 1984、「ディルタイ解釈学の形態学的視座」『思想』岩波書店 716：45 参照。

を孕んだ徹底した破壊衝動 「永遠に呑みこみ、永遠に反芻する怪物」<sup>16)</sup> のなかに直観されている。世界の創造母胎であり、人間の故郷でもある根源的自然にたいする希求は、とりわけドイツ・ロマンティークの運動において鮮明に主題化されるものである。あるいはそれは『ヴィルヘルム・マイスター』からのビルドゥンクス・ロマーンの伝統のなかで詩的に結晶化されてゆく。こうした汎神論的もしくは有機的自然観の系譜は、ロマンティークを貫流して、たとえばその後裔ともいえるユング(Jung, Carl Gustav 1875-1961)の分析心理学にも深く刻印されている。それは同時に心的生(精神)の形態学としても、きわめて興味ぶかい<sup>17)</sup>。

#### 4. 分析心理学

以下では分析心理学の構造を、その形態学の側面に焦点をしばってとらえてみたい。さてユング心理学の基本命題は、個性化過程(Individuationsprozeß)とよばれる広義の人間形成過程の考察に集約されている。それは超個人的で人間に普遍的な深層心理の構造をも内包した心的生の全体性をあらわす「自己(セルフ)実現のプロセスである。「自己」とは(人格のあらたな)中心であるばかりでなく、意識と無意識を包摂するところの全領域であり、自我が意識の中心であるように、「こころの総体の中心」<sup>18)</sup>として定義される極限概念である。そして個性化とは、「自己」を人格統合の中心ならびに目標として展開していく生のプロセスであり、「無意識における人格形成的求心過程」<sup>19)</sup>を意味する。

個性化についてのユングの広範にわたる独自の思索は、あくまで精神科医・心理療法家としての具体的な実践活動とその生々しい臨床状況から発想されている。すなわちユングは本来、今世紀初頭における力動精神医学の草創期を時代背景として、若き分裂病研究者として出発した。しかし同時にまた、その具体的な症例解釈のただなかに、神話とも形而上学ともよべるような思索が突如織りあわされてくる。ユングのテキスト解釈をきわめて難解かつ曖昧なものとし、解釈者をたびたびとまどわせるのは、このような臨床の知と神話の知とが切りむすぶ独自の知の構造のためである。心的生の深層化と普遍化の動向は、分析心理学の構想に当初から胚胎していた形態学のモチーフと、はたしてどのように連関するのであろうか。

#### 5. 元型構造

ここで分析心理学の構造全体を規定する作業仮説として元型論に簡単にふれておきたい。たとえば心的生は個人の意識内容あるいは無意識内容には、もっぱら還元しえないような普遍的

16) Goethe, HA.: 6. *Die Leiden des jungen Werthers.*: 53.

17) 広義の人間形成論としてのユングの個性化思想についての考察は、拙著 1995 『ユング個性化思想の構造』福村出版参照。

18) Jung, C. G., *Die Gesammelte Werke*, Walter-Verlag, Olten und Freiburg im Breisgau, 12: 44(巻数のあとの数字はパラグラフ番号)。

19) *ibid.*: 564.

なイメージをしばしば無意識に産出する。ユングは人間の無意識内容に集合性(普遍性)をもたらす心的生の構造あるいは構想力(想像力)のカテゴリーとして、元型(Archetypus)を仮定する。これを定式化すれば元型とは、集合無意識の構造を構成する規定要因であり、心的生の根源的な形相的側面であるともいえる。それは人類のプシュケーにいわば本源的にそなわる構想力のシェーマでもある。

創造的構想力がわれわれにとって唯一 近づきうる心の根源現象であり、心の本来的な存在基盤であって、ただひとつの直接的な現実であることをわたしは確信しております。それゆえにわたしは、魂における存在 について、すなわちわれわれが直接に経験することのできる唯一の存在について語るのです<sup>20)</sup>。

こうしたことから存在論的にとらえれば、それはカオス(=根源的無分節状態)から個々の存在者(個物)が意味として分節化されて、現象してくる存在分節の構造(存在秩序)に深く即応した事態であるともいえる。いわばそれは神話を生成する構想力が紡ぎだすシンボリズムという関係性の網目を焦点として結晶化してくる意味の場所でもあろう。「無意識の心の神話形成的構造要因」<sup>21)</sup>として、元型は神話の知を形象化するのである。

## 6. 心的生の重層性

さて元型はそれ自体としては表象化あるいは認識化不可能な、存在分節の構造上のア・プリオリとしてはたらく。表象化されるのは、あくまでカタチとしての元型イメージである。それは存在体験のアルケー(始源/根源)を触知する深層知への動向と、経験のチューボス(規範/類型)を志向する普遍知への動向とが重層しあう体験の痕跡である。いわば知の垂直性と水平性とが象徴的に交錯しあう“始源の範型”ともいえようか。

シンボリズムに深く浸透された存在経験は、意識の深層化とあいまって、濃密に重層化・多層化された世界(自然)経験を開示する。自然経験の深まりは、根源的自然の形象化 カタチによる意味の結晶化 を誘発し、許容する。「形象と意味とは同一であって、前者がみずからを形成するように、後者はみずからを明瞭化する」<sup>22)</sup>。それは形態と自然、カタチと生命との密かな共振・共鳴でもあろう。「形象は本能の意味をあらわす」<sup>23)</sup>ことになる。また存在経験の始源のカタチは、自己創造的に発露し、戯れるように変容をくりかえす。「すべての人々と彼女(自然)は好意的な賭け事をおこない、ひとが彼女から手にいれるのが多ければ多いほど歡ぶ」<sup>24)</sup>。そして自然はその存在の秘儀をうちあけるのに、カタチを必要とし、カタチによる

20) Jung, Briefe. (Briefe in drei Bänden, herausgegeben von Aniela Jaffé in Zusammenarbeit mit Gerhard Adler), Walter-Verlag, Olten: 86.

21) Jung, G. W. 9/1: 259.

22) Jung, G. W. 8: 402.

23) ibid.: 398.

24) Goethe, HA. 13: 46.

自己限定をとおしてみずからを現象へともたらずのである。こうして元型は根源的自然という生命基盤を核として、「本能的力の形態原理」<sup>25)</sup>として理解されるのである。

自然は戯れるようにカタチの変容を反復し、人間にかぎらずとも生命あるものは全般に、何層にも積みかさなったりズム構造のくりかえしのなかで息づいている。その重層したリズム構造は、意識の深層から湧出してくる生命感覚のゆらぎ/律動とも共振するものであろう。こうした生命現象の構造的からうかがえるのは、根源的な存在経験にまつわる重層性ということであり、それはたとえば意識の深層性(深層意識)/自然構造の階層性/世界経験の重層性といった事象として立ちあらわれてくる。

## 7. 生のトリアーデ

ユングの分析心理学は広義の自然学として、直接にはドイツ・ロマンティックの、特にロマン主義精神医学<sup>26)</sup>の伝統と自然哲学の遺産をひきつぐ後裔といえるが、その構想においては色濃くゲーテ自然学の系譜をうけついでいる。試みに分析心理学の自然学としての構成を簡単に図式化して述べるとすれば、たとえば以下になる。

- ( ) ユングにとって無意識 存在( das Unbewußt-sein )の核心は、われわれの内なる自然としての純粹自然として位置づけられる。純粹自然とは、絶対にノエマ的客観化、対象化認識を拒絶する 非表象性 生命根拠全般にも通底する能産的自然としての根源的自然性を意味する。
- ( ) 無意識はその集合性( 普遍性 )という契機をきわだたされることによって、個人の意識・無意識の両者を包摂し、これらをいわば存在論的に超えつつむ包越的 場所 として規定される。
- ( ) さらに構想力( 想像力 )はいわば象徴化の論理として、自然/無意識の形成衝動に即応した内的形象の能動的な喚起作用として機能する。すなわち構想力は、集合無意識を根源的自然へとひらかれた“窓/通路”として予想し、両契機を象徴形成 形象創造というかたちで媒介することになる。

以上、( )根源的自然( )集合無意識( )構想力という三契機による心的生の緊密なトリアーデが、分析心理学の基層をつらぬく元型論を構造化することになる。

25) Jung, G. W. 8: 416.

26) ロマン主義精神医学の代表者としては、たとえばC. G. カールス( Carus, Carl Gustav 1789-1869 )があげられる。

## 8. 個性化と形態学

ところで個性化の運動は、さきに述べたトリアーディシュに構造化された元型論にもとづいて進行する。そこで個性化というライトモチーフをみちびくのは「自己」という生の元型であった。ユングの個性化思想は、この「自己」の実現過程の現象学に収斂されるといってもよい。

そこではゲート形態学の主要理念、たとえば両極性の理念（不断の引力(牽引)と斥力(反撥)）は、心臓の収縮と拡張関係の類比において、初期の『心理学的類型論』(1921)をもとづける求心的な内向性と遠心的な外向性の着想へと発展している。フロイトの精神分析運動と袂をわかって(1913)からはじめて、みずからの思想の立脚点をしめした著作がティポロギーをめぐるものであったことは、その後の思想展開を示唆している点でも興味ぶかい。さらに初期の著作『リビドーの変容と象徴』(1911/1912) / 改訂版『変容の象徴』(1952)においても、神話的類型の解釈をめぐる独自の思索が詳細に展開されている。そこでは個人の夢、幻想、分裂病者の妄想などの本質と、古代神話、宗教祭祀儀礼、民族伝承説話などの本質とが、類型化された原形象の直観を媒介として、メタファー(隠喩)・アナロジー(類比/類推)・ホモロジー(相同/相似)などによる解釈法の駆使によって架橋されている。

両極分離性の理念は、生ならびに自然一般の力動性をつかさどる原点であり、この力動関係から派生してくる両極どうしの相補的な呼び求めあい(フォルデルング/ゲート色彩論)は、ユングでは意識・無意識連関における「補償」概念（たとえば夢における元型イメージによる眩惑あるいは憑依現象）へと翻案される。さらにはより高次の秩序をめざす生の根本力動性である高昇理念（たえざる上昇の努力）は、本来的自己性の実現をめざす個性化の理念へと収斂されてゆくことになる。

さらに「心・身」の諸連関をめぐる論点は、生の全体性を志向・模索する心身の統合過程でもある個性化においても要諦をなすが、それは従来の物心二元論に後退するのではなく、独自の共振/共鳴関係ともいえる晩年の類心性(プシコイド)論<sup>27)</sup>へと発展する経緯をみせている。すなわち「精神の形態学」はさらに「心身の形態学」へと転成する兆しをしめすのである。

このように形態学の諸理念は、さまざまな次元でユング的メタモルフォーゼを被りながら、より洗練されたかたちで個性化のエートを浮き彫りにするのである。

27) ユングの類心性概念については、拙著第六章参照。